高山の文化を築いた人々 22

観世流謡「吉祥会」創立者 加藤吉助

八賀サト子

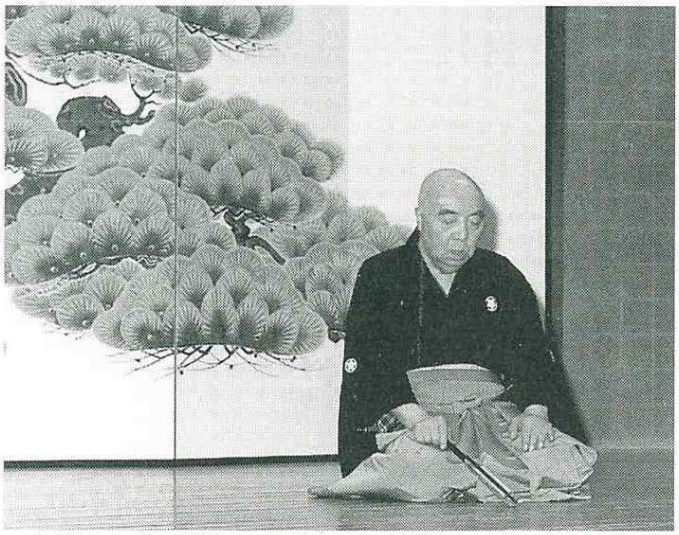
「加藤のおじさん」近所に住む私達は、加藤吉助さんをそう呼んでいました。

明治三十六年一月一日生まれで、幼名は「虎造」。元郵政大臣だった古池信三氏とは、幼い時からの遊び友達で「信さま」「虎さま」と呼び合っていたと話していました。

高山市消防団長、高山市消防長を永年務め、出初め式などでの号令、訓辞など、よく通る大きな声はおじさんの自慢でもありました。

家業の京染商の関係で京都へ出かけることが多く、その時たまたま聞いた謡に興味を持ち、観世流の謡を習い始めたそうです。高山に帰り一人で謡うより友人知人と共に謡うのが楽しみとなり、夕方になると二階から謡の声が聞こえてきました。

やがて、謡を習いに来る人も多くなり「吉祥会」が発足すると、本業よりも謡の方が忙しくなり、店の帳場でも謡関係の仕事が多くなりました。小謡集などを編集したり、謡の番組を作ったりと、おじさんの生活の中で謡曲は切り離せないものになりました。



吉祥会三十五周年記念謡会にて勧進帳を謡う（86歳）

また、冠婚葬祭について高山のしきたりをよく知っていたので、相談や教えてもらいたい人達がよく訪ねてきていました。

高山の結婚式は一日、二日と長い披露宴が多かったそうですが、昭和三十年代に入ると結婚式の簡素化から、「公民館結婚式」が盛んに行われました。その中での謡は、公民館から依頼され、加藤のおじさんが謡っていました。

そこで高山の冠婚の習慣を基にして、厳粛な中にも優雅さのある結婚式のあり方をまとめた小冊子『御婚礼のあらまし』を作り、多くの人達に喜ばれました。当時結婚式を挙げられた方の家のどこかで、この冊子が見られるかもしれません。

また、「高山時間」といって意外と時間にルーズなことが多く、会議等の開催時間になかなか出席者が集まらず、始まりが遅くなることがよくありました。しかし、加藤のおじさんは時間に厳しく、きちんと守られ、高山市に「時を守る会」という会があり、表彰されたこともありました。

祭りは人一倍大好きで、春の高山祭屋台「龍神台」にも多くの貢献をされました。祭りには赤い陣羽織を着て、屋台のかじをとる「大でこ」の役は、おじさんの何十年もの務めでした。赤い衣装がよく目立ったので、観光客との記念写真のモデルになったり、龍神のからくりの謡曲「竹生島」を謡ったりして、高山祭はおじさんの大活躍の場でした。

平成四年二月二十三日、春の高山祭を前にして亡くなられました。享年九十歳でした。